

くらしと協同の本

ルース・フィネガン 著 湯川 新 訳

『隠れた音楽家たち イングランドの町の音楽作り』

【BookData】

発行 法政大学出版局 2011 年 10 月 574 ページ

値段 6,600 円 + 税

ISBN : 978-4-5884-1025-3



評者：岡田 暁生（京都大学人文科学研究所教授）

学生時代は別として、どれだけ音楽が好きでも、社会人になってなお音楽活動を継続するのは難しい。もはや音楽といえば、CD やコンサートを聴くばかり。高校時代に使っていた楽器は埃をかぶり、自分でする音楽はせいぜいカラオケ。こんな人は少なくあるまい。またサラリーマンなどをやりながら、頑張ってアマチュア・オーケストラでヴァイオリンを弾き続けていたとしても、自らの活動を「所詮素人芸ですから…」と謙遜する人は多かろう。それに対して本書の著者は、「プロの演奏を聴く」のではない、「アマチュアが自分でする」形にこそ、音楽の本来のありようを見出そうとする。

もともとルース・フィネガンはアフリカをフィールドとする社会人類学者である。だが彼女がこの本でフィールドワークの対象とするのは、ロンドン近くの新興都市の音楽活動だ。例えばロンドンと比べるなら、こんな小さな町のコンサートライフは、取るに足らないものとも見えよう。クラシックのメジャー・オーケストラの来演もなければ、ポップスのスターがやってくることもない。そういうものが聞きたいなら、ロンドンに出かけていかねばならない…。だが目を凝らせば、そんな地方都市でも、決して大都会に遜色ない音楽活動が繰り広げられて

いる。パブで行なわれるポップスやジャズのライブ、アマチュアの合唱団やオーケストラ、ブラスバンドや教会音楽。中には肉屋をやりながらプロよりうまい歌手がいたりする。しかし彼らの本業は、ミュージシャンではないのだ。

この本のアプローチの特徴は二点ある。まず第一に、こうしたサブカルチャー的な音楽活動は、ややもすると社会学によって「文化産業を消費する大衆」といった眺められ方をされがちだが、単にマスコミなどに踊らされるだけではなく、もっと地に足がついた、自分たち自身の意志で、自分たち自身の音楽を、自分たち自身のペースでやっているアマチュアたちに、本書は光を当てている点。そして第二に、同じく社会学が過剰に強調しがちな「下層文化」的なものに偏らず、そこではクラシック音楽もロックと同じように、様々なアマチュアによって熱心に演奏されていることが明らかにされている点。

「音楽」といえば、今日の私たちは、何よりもまず「聴くもの」だと思いがちだ。だが本当にそうだろうか？ プロがステージの上でやる完璧な「ショー」を、安くはない入場料を出して「聴く」ことが、音楽受容の唯一の形などというのは、どこか歪んではいないだろうか？ どんなに下手でも、やっぱり自分で音を出す方が、

他人が演奏するのを聴くよりも楽しいし、もし仲間とそこそこの合奏が出来るくらいに上達したら、さらに楽しみは増すだろう。本当は音楽とは、「聴くもの」というより、「自分でするもの」のはずなのだ。

この本で描かれているような、豊穡なるアマチュアの音楽文化は恐らく、十九世紀以来のイギリスにおける「アソシエーション」の伝統と無関係ではあるまい。普段の職業とは関係なく、サッカーや合唱や詩の朗読やアンティークなどあらゆる趣味の領域で、大人のためのクラブともいべき社交組織が活動してきたのである。こうした文化を日本で探すなら、江戸町人以来の「お稽古ごと」であろうが（謡や日舞など）、ただし戦後日本のモーレツ・サラリーマン時代になると、もはやこうした種類の優雅な趣味人文化は、まったく姿を消してしまったと考えざるをえない。

本書にはとにかく多種多様なケースが紹介されている。きっと何か自分の「生き方探し」の参考になる事例があるはずである。

日本でも東京や京都といった大都会になると、近年アマチュアたちの余暇の音楽活動も相当盛んになってきた。

私の友人にも会社の役員をやりながら毎月二回くらいライブハウスに出演している人、アマチュア弦楽四重奏団を結成してベートーヴェンの全曲演奏に挑んでいる人、ヴェルディに入れ込んでとうとう会社を定年退職してからイタリア・オペラだけをかけるワイン・バーを開いてしまった人など、結構な強者がいる。

私のように音楽を仕事にしまった者から見ると、それをあくまで趣味にとどめつつ、それを極めて高いレベルで実践しつづけるこういった人たちは、本当にうらやましい。

だがそれでもなお、日本ではこうした趣味と仕事の両立は、まだまだ一握りの色々な面で恵まれた人の特権のように思われがちだし、また事実ある程度そうなのであろう。

それに対して本書で描かれているのは、決して富裕層の優雅なミュージックライフではない。主役はあくまでイギリスの中小都市の「普通の人たち」だ。

言うまでもなく、「豊かさ」とは決して金銭だけの問題ではない。そういえば非常に多くの趣味をもつ、自営業をやっている私の友人が言っていた。「忙しすぎて趣味ができなくなったら仕事のやりすぎ、趣味をやりすぎて仕事に赤字が出来たら遊び過ぎ」。名言である。

「こんな大変な時に遊んでいる暇なんてないんだ!」とばかり、イライラした仕事漬けの日常に居直る精神は、やはり貧しい。

殺伐としている。仕事がいよときも、よくないときも、自分の趣味の世界だけはマイペースで堅持し続けることの尊さを、今さらのように思う。音楽論というにとどまらず、豊かな市民生活とは一体何か考えるうえでも、とても示唆に富んだ本書である。